信子はもうお咲を氣味惡い者に感付いて居た、目は見ぬながら、まだ夕暮刻の公園である、口さへ利けば京子を呼び戻せぬこともあるまいと思つて聲を限りに京子の名を呼んだ。

お咲は四邊の人に氣を配つて、今にも袂を信子の口に當やうとした、驚け付けた鹿造を見ると、右手で轅棒を揚げる狀をして、顏を逆にしやくらせて見せた、俥を早く呼べといふのであつた。

鹿造が大急ぎで拾ひ俥を連れて來た時、お咲は襦袢の片袖を裂いて、それを信子の口中へ力任せに押し込んで居た、三味線の棹は折れ、信子の衣物は方々綻びて、手の甲には生々しい搔き瑕さへあつた、けれどもう聲は立てられなかつた。

「早く、早く、早くさ」

お咲は地烈度さうに急き立てた、鹿造は心得てお咲へ加勢に走つた、死物

狂ひに藻掻く信子を、鹿造とお咲は手取り足取りして、用意の俥へ抱え込まうとした。

「何だ〳〵」

それと見た彌次馬が四五人俥の前後を圍んだ。

「氣が狂つて居るので何うも始末に付かない」

鹿造は彌次馬を見返りながら云つた」

「あア狂人か」

「盲目の狂女は氣拔だな」

彌次馬は突ひながら見物して居た。

狂人と聞いて車夫まで加勢を始めた。

死物狂ひの信子も到底三人の力には及ばなかつた。

手足の動きも取れず、助けを呼ぶにも聲は出ず、見ぬ目から涙をほろほ

ろ零しながら、運命と身柄を俥に載せて、今にも何處へか連れ行かれやうとした時、禿下駄の音が次第に近寄つて、突如俥の轅棒を掴んだものがあつた

「車夫待てッ」

一喝を喰はせて、車上から信子を抱き却したのは和歌子の兄の岩雄であつた。遲れ走せに駈けつけた和歌子に信子を渡すと、岩雄は鹿造の眼前へねッと立ち跨がつた。

「秋山、我輩は岩雄だ」

岩雄と聞いて秋山は悸乎として身を退いた。餘りの意外さに眼の珠ばかりクリ〳〵させて居たが、隙を見て脚も云はず逃げ出した。

「逃がすかッ」

岩雄は宙を飛んで後を逐ふた。

和歌子は信子の轡を脱して、後方に庇護しつゝ佶とお咲を見詰めて居た。

お咲は和歌子と顔見合つて、恟として身を退いたが、折角此處まで連れ出した信子を其まゝでは殘念とでも思つたか、

「車夫さん、謝禮はうむと奮發むから加勢してお呉れな」

「何うすれば宜しいんで？」

「今の間に盲婆さんを載せて驅出すんだよ」

云ひ〳〵信子に掴みかゝつて、早く、早くさ」車夫を急き立てゝ擔き上げやうとした。

「何をなさる」

和歌子はお咲を突き放して信子を庇ひながら立ち上つた。

「何はお金儲けなんだよ、お退き、邪魔すると利にならないよ」

「お咲さん、あなたは隨分恐ろしい……」

口惜しさと怨めしさに和歌子は口も利けなかつた。信子はお咲と聞いて身顫ひした。

「和歌子、それでは其處の人はお咲さんだつたのかね」

「阿母さんはお咲さんとは知らなかつたのですか」

「知らなかつた、欺されて居た……」

「お咲さんばかりか、阿母さん、秋山も居たのです」

「ねゝッ、秋山も……」

信子は思はず顫ね上つて、

「何處に？、私山は何處に？」

信子は両手で胸を掻き拐りながら和歌子の背後を右へ左へと探り歩いた。

「秋山さん、鹿造さん……」

「それと見たお咲は突然信子に摑みかゝつて、

「車夫さん、早く、早く」

車夫は心得て加勢に走つた。和歌子は遣らじと信子に取縋つて、

「誰か、誰か來て下さいー」

救ひを求める聲に彌次馬が六七人驅け付けた。

「何だ、何だ」

「女の喧嘩か」

「盲目も居るぢやないか」

取圍んだ彌次馬をお咲は早くも見て

「ちよいとお前さん方、强生だから加勢してお呉んなさいよ、此奴は氣が狂つてるんだから俥に載せて我宅へ連れて行くんだからさ」

「何だ狂女か」

懐中に燐寸や刄物を持つてるんだから、放棄つといては何那ことするか知

れないんだよ、私たちが恁うして両手を持つて居るから、お前さん方引擔いで俥へ載つけてお呉れな」

「諾、加勢してやらう」

「俺も助けてやるぜ」

三四人の彌次馬がお咲へ加勢して信子の手取足取した。

和歌子は聲を限りに

「違ひます、違ひます、此お媼さんが惡者なんです」

「だつて此奴が狂女だつてぢやないか」

「狂女ぢやありません、私の母です、母です」

信子〻身を藻掻きながら、

「皆さん、お助け下さいまし、私は狂女ではございません、此婦人が惡者の手先なのです、私を欺して連れ行かうとするのです、お顏ひでございますお

助け下さいまし」

云ふ聲に彌次馬は皆手を放した。

「狂女ぢやねねせ」

「狂女なもんか、此婆々が欺しやがつたんだ」

「婆々をやつちまへ」

「殴れ〳〵」

傍で見て居た者まで加勢して、六七人が同時にお咲を殴り初めた。お咲は叶はじと俥に飛乗つて、

「車夫さん、早く、早く逃げてお呉れ」

四十五

逃かすな殴れ」

彌次馬は逃がさじと後を追ふた。

「早く、早く、車夫さん」

お咲は車上で地團太を踏んで居た、懸命に駛る俥の後を、彌次馬は面白半分に追ひ駈ながら、砂を蒔く、石を投げる、中には先廻りをして下水を引ッかける者さへあつた。

「何だす」

「泥棒だすよと」

「萬引女だらう」

「萬引女が俥で逃げるとは生意氣だ」

「引き擦り下せ」

「疊ん了へ」

俥が新世界へ逃げ込んだ頃、彌次馬は五十人近くも集まつて、潮の如く車

を取圍むと見る間にお咲を車上から引き擦り下した、毆る、蹴る、踏む……やがて警官が駈付けた頃にはお咲はもう虫の息であつた。

「和歌子、勘辨して下さい」

彌次馬が車の後を逐ふて走つた後で信子は初めて恁う云つて詫た。

「お前の吩咐を守らないで、恁那ところへ出て來たものだから……心配をかけて濟まない」

「可いんですよ、阿母さん、無事でさへ居て下すつたら今更何ういふこともありませんわ、だけど阿母さんは隨分な目にお遇ひでしたわね」

「私が酷い目に遇つたのは自業自得です、だけど和歌子、好く私を助けてお呉れだつたね」

「阿母さん、私がお助けしたのぢやありません、阿兄さんが助けて下すつたのです」

「阿兄さんが助けた？、それは何家の誰のことです？」
「十幾年も遇はなかつた吾家の阿兄さんです」
「吾家の阿兄さんとは、岩雄のことかね？」
「爾なの」
「和歌子、な、何とお云ひだ」
信子は手探りに和歌子へ取付いて、
「岩雄が助けたとは私には合點がゆかない、和歌子、好い加減なことお云ひぢやあるまいね」
「私だつて夢のやうに思つたのですもの、阿母さんが爾お思ひなさるも無理ぢやありません、實はね阿母さん、先刻此公園で阿兄さんに逢ひましたの」
「岩雄と逢つた？」
「阿母さんを探すために態々大阪へ出て來たのですつて」

「私を探しに大阪へ來た、岩雄が私を探しに大阪へ……？」
信子は嬉しさに夢中になつて、
「そして、何處に、何處にお居でだね和歌子、逢はせてお呉れ、早く、早く逢はせてお呉れ」
「阿兄さんは今秋山の後を跟けて」
「居ないのかね」
「秋山へ跟けて行つて、まだ戻つて被來らないんですの」
「和歌子、嘘でせう？、私を悦ばせやうと思つて云つたのだらう？」
信子は慌てた態で、
「岩雄が私を探して呉れる譯がない、貞婦二夫に見ずと云ふ教訓を、私は岩雄から幾十度聞かせられたか知れなかつたのだ、それをも背いて秋山のやうな、鬼とも蛇とも知れない男に肌身を任せて、身を穢したばかりか、子供

といふ子供へ苦勞ばかりかけて……不貞な女とも、無慈悲な親とも、譬がたない私だもの、岩雄が何んで私を探して呉れるものか、目まで失られた此姿を見たら、天罰といふだらう、身から出た錆だと笑ふだらう、岩雄にも面目ない……」

「阿母さん、過去は過去として葬りませう、そして更に親子が新生涯に入らうちやありませんか」

云ふ聲は岩雄であつた。

「阿母さん、阿兄さんです」

和歌子に注意されて、

「ねッ、岩雄かね」

「僕です阿母さん」

手を把られて信子は吾知らず獅嚙み付いた。

「岩雄、許して下さい……」

四十六

「何も彼も秋山が惡いんですわ、阿兄さん」

和歌子は朝鮮へ賣られたことまで語つて、

「私、死んでも秋山の怨みは忘れません、阿母さんが恁那ものを彈いて」

脚下に踏み蹂られて居る三味線の破片を拾つて、

「門附にまでなつたのも皆秋山のお蔭なのです、私また阿母さんは、現在でも私山の世話になつて被居ることゝばかり思つてたものだから……恁那ことゝ知つたら私、馬鹿になつちや居なかつたのです　種吉のことを思ひ出して

「それを思ふと私、殘念で、殘念でなりませんわ……」

「それも是れも皆私が……和歌子、許してお呉れ」

「いゝね、阿母さんが惡いのぢやありません、子供が三人まであつたのですもの、誰だつて親切に云つて呉れる人があれば世話になります、唯ね阿母さん、秋山が阿母さんを欺したかと思ふと、それが私口惜しいんですの」

「秋山に欺されることは、あの當時岩雄の心には分つて居たのだ、分つて居たればこそ岩雄が口を酸ばくして私を諫言してお呉れだつたのだけれど、肝腎の私の目が見ねなかつた、迷ひの夢が後になつて覺めたのだ、仍且私が惡い……今は此目は潰れて居ても、心の目は開いてゐる、何故心の目が最初に開かなかつたかと、私はそれが殘念でなりません、此目が二つとも開いて居る時は、心の目が曇つて見ねなかつたのだ、それがためにお前や岩雄にまで苦勞をかけて……」

と泣く。岩雄は賺すやうに、

「阿母さん、もう過去のことはお止しなさい、それが愚痴といふものです、

和歌子も苦勞はしたでせうが、それがためにまた益することもあつたでせう恰度貴女の心の目が開いたやうに、何物かゝ逆境のために磨かれて居る筈です、貴女も、和歌子も、見受けるところ悲慘な生活をして居られるやうだが幸に僕は今年大學を卒業して、これでも工學士の端くれなんですから、もう生活に苦しめるやうなことは斷じてさせません」

「お前が大學を卒業した？」

「阿兄さんが工學士？」

「それは眞實かね岩雄」

「阿兄さん嘘ぢやないわねね」

信子と和歌子は左右から取卷いた。

「安心して下さい、また僞言まで言つて母や妹を悅ばせるほどに岩雄は悧巧になつちや居ませんから」

微笑んで、

「これでも岩崎のお抱ねで、百二十圓の月給取です」

「月給が百二十圓！」

信子は見ぬ目を一杯に睜つた。

「在學中から約束が出來て居て、辭令は先月の十日に貰つて居ます、實を云へば今月一日から出勤しなけやならない身なのですが、貴女や妹のことも氣になるものだから」

「和歌子、夢ではないだらうか」

和歌子の手に取縋つて、信子は嬉し笑ひに笑ひながら泣いた。

「だから和歌子も安心して呉れるが可い、子供もあれば引受けて敎育しやうぢやないか」

子供と聞いて和歌子は信子の手を振放した。

「阿母さん、京子は？、京子は阿母さん」

「京子？」

「京子は？、京子は阿母さん」

「京子……？」

信子は両手を胸の邊で垂れて、呆然と立ち盡して居た、「京子……京子……？」

和歌子は狂氣したやうに四邊を探し初めた。

四十七

是より曩、天流子は公園を東へ拔けて、一心寺前を天王寺の方へ昇つて居た、と、上手から藁蕊帽の廂を下げた若い男が降つて來た、薩摩絣に金紗の兵兒帶を締めて、片手に細い藤の洋杖を支いて居る、實であつた。

「小兄さん」

「やア」

二人は寺の石垣前で差向ひに立止まつた。

「知れて？」

「知れない、君は？」

「私もよ」

「そして是から何處へ行くんだ」

「天王寺の境内を捜して見やうと思つて」

「駄目だ、僕は今境内を一周して熟々愚なることを感じたところなんだ、天流さん、方法を變更しなくちや駄目だ、先方だつて靜物ぢやないんだからね僕等が探し廻る如く、先方だつて絶ねず動いてるさ、假し動いて居たつても

だ、必ず此邊に居るといふ約束でもあれば何とかして目付けるよ、爾でない

んだからね、僕等が此方面を探して居る間先方ぢや中の島公園を逍遙てゐるかも知れない、僕等が中の島へ行く一ト足ちがひに、築港へでも行つて御覽もう目付かる氣遣ひはないだらう、愚だよ、愚の極だ」

「ぢや、何うすれば可くつて？」

「新聞へ廣告したら何うかと思ふんだ、笹木岩雄氏、是非御面會したし、天流子……其奴も拙いな、はゝゝゝ」

「困つたわね」

「警察へ頼めば譯はないんだがね」

「理由を云はなけやならないでせう？」

「云つたつて可いぢやないか、姉さんの戀物語ぢや拙いけれど、君が探して貰ふことにすれば立派な理由だけど、待てよ、警察へは新聞記者が出入をするから新聞へ出るから知れない、十幾年逢はぬ兄を探す令孃、かなんかの

標題で君の寫眞なぞ入れて夕刊々々とやられて見給ゐ君が困るだらう」

「困るわ」

困つたね、何うしやう？」

天流子を見詰めて

「是が非でも僕は探すよ、姉の生命に係はることなんだからね」

「私だつて爾だわ」

思ひ込んで

「ぢや小兄さん、私介意ないから警察へ頼んで頂戴、私が困るなぞと云つて居られる場合ぢやないわ」

「新聞に出るよ」

「介意ないことよ」

度胸を決めたね」

「恁那時に姉さまへ御恩返しをしなけや、する時はありやしないわ」

「可、それでこそ義姉妹だ、天流ちやん、敬意を表する」

實は手頸から先を腰の邊りで揚げて見せた。天流子は横を向いて、

「厭よ、小兄さん」

恰ど此時、電車道の向ひ側を、京子が職人に手を曳かれて泣く〳〵坂を昇つて居た。公園の方を振回つては泣く京子と、嚙み付くやうに叱る職人の顔が天流子の眼へ瞥と映つた。

呀ッ、彼の子だ」

實も其れと見て

「僕も彼の子は見たことがあるよ、君知つてるの？」

「知らないけど好く逢ふ子よ、可哀さうに泣いて居てよ、あら、打たれてよ

あら、捻られてよ」

「彼の男は何だらう？、父親ぢやないね、兄でもないだらう、兄が彼那苛酷ことする筈はない」

云つてる間に京子は安居天神前で俥に乗せられた。

天流子も實も默つて見て居た。

「何處かへ連れて行かれるんだね」

「可哀さうだわ」

やがて車は上手へ、天流子と實は下手へ降つた。

「念の爲めにま一度公園を一巡して見やう」

實が先に立つて公園の方へ入つて行つた。

四十八

實と天流子は一緒に歩くのが體裁が惡かつた、三間ばかり間隔を置いて實

が先頭に、天流子が後から跟て歩いた。

動物園前の懸鈴樹の間を拔けて、枝道を運動場へ曲らうとした時、行手から岩雄が急ぎ足で歩み寄つた。

「君、君は今彼方から來ましたね」

岩雄は實の前に立つて訊いた。

「あッ貴方だ」

實は思はず帽子を脫つた。岩雄は氣にも止めずに

「彼方へ五つばかりの女の子を連れて行くものはなかつたですか」

「貴方は笹木さんでせう？」

實は別なことを訊いた。二人とも對手の質問は耳へ入らなかつた。

「見なかつたですか、五つばかりの女の子です」

「貴方は笹木岩雄さんでせう？僕は貴方を知つて居ます」

連れて行つた男は職人體の男だ、見なかつたかね？」

「笹木さん、僕は鎌倉の美山です」

鎌倉の美山と聞いて岩雄は初めて實を見直した。

「美山絹江の弟です」

實が附け加へた。岩雄は默つて瞬叩もせず見守つた。懐舊の念に堪ぬ態で

「姉さんは御健在ですか」

實は何故か胸が迫つた。俯むき勝に、

「姉は、貴方のことばかり思つて居ます……」

聲が微に顫へた。

岩雄はまた少時眼ばかり動搖させて、

「今は何方に？」

「姉も僕も大阪に居ます」

云つて、拳で密と眼を拭いた。

「ちや、君は姉さんと御同居ですか」

「爾です」

「君から宜しく云つて呉れ給へ」

岩雄は思ひ直して行きかける、實は力一杯袴の襞を掴んで、

「笹木さん、待つて下さい」

「少し心急きだから後日」

「貴方の妹さんも居ます」

妹と聞いて岩雄は思はず振回つた。

「君は僕の妹を知つて居ますか」

「知つて居ますとも、何年か同居して居るのです」

岩雄は不審の眉を寄せて、

「ぢや、君は京子といふ子供を知つてませう？」
「京子？知りません」
「何年か同居して居て妹の子を知らない筈はない、それは誰かの人間ちがひだ、後日また逢ひませう」
掴まれた手を徐と脱して、岩雄はまた行きかける、その手に這度は天流子が取縋つた、
「阿兄さん、私よ」
岩雄はまた不審の眉を寄せた、流行色の薄物に香水の香を匂はせた、美しい、妙齢の、何う見ても大家の令嬢らしい女を妹に持つて居やうとは、岩雄は夢にも思つて居なかつた。
君は誰方ですか」
眞面目に他所々々しく訊かれて天流子は思はず手を放した、心持面を染め

て、
「私、天流ですわ」
「天流？妹の天流？」
岩雄はまじ〳〵と見上げ見下し、「天流子か」
「分つて？」
羞は含んで懐かしく上目を使つた。岩雄は仰山に胸を反らせて
「素晴しくハイカラになつたね」
「あら、厭よ阿兄さん」

四十九

岩雄は改めて、
「美山君と同居して居るといふのはお前のことか」

天流子は頷いて、

「私が巽へ養女に貰はれて行つたこと阿兄さんは知らなくつて？」

「巽へ貰はれて行つたことは聞いて居るが、巽と美山君とは何ういふ關係なのだ？

「巽の養母さんと美山の亡母さんとは姉妹ですわ」

「巽の家内は僕たちの伯母です」

實が口を添へた。岩雄は意外の面持で、

「ぢや、美山君は巽と同居なのですね？」

「僕も、僕の姉も、目下巽の厄介になつて居るのです」

「さうですか」

岩雄は奇縁に寧ろ呆れて、

「巽が大阪へ轉住になつたことは聞いて居たが、天流子と同時に美山君に遇

遇するとは實に意外だ、此處で逢ふとは全く奇遇ですね」

「阿兄さん、奇遇でも意外でもありませんわ、私たちは阿兄さんを一所懸命捜してたんですもの、ねゝ小兄さん」

「僕は二三日前此公園で貴方をお見受けしました」

實が引き取つて、

「其時から貴方が大阪に被居ることを知つて、僕は貴方を捜して居たのです大學を卒業なすつたことも新聞で拜見しました、僕の姉の意中の……いや、何が、天流さんの實兄さんであることは新聞に掲載されたお寫眞で初めて知つたのです、姉も不思議な縁に驚いて居ましまつけ」

「ぢや、君の姉さんも大阪へ縁附いてお居でなのですね」

「曾て一度も嫁したことはありません」

實は詞に力を入れて云つた。

「阿兄さん」

天流が崩み出て、

美山のお姉さまは、誰が何と云つても何家へもお嫁に被行らないの、二十五の今日まで、阿兄さんに貞操を立てゝ被居るんですわ」

「ぢや、未だに獨身なのか」

「處女です」

實が昂奮した口調で云つた、岩雄が思はず太息すると、實も誘られ氣味に太息を吐いて、

「姉は寧ろ老嬢です、貴方の御同情に縋るより外ありません」

姉思ひの實の心根を想ふと、天流子は知らず識らず胸が詰つた。

「阿兄さん、お姉さまの意中を察して上げて下さい、それはお可哀さうな人よ……年中阿兄さんのことばかり思つて……泣いて被居ることなぞ私幾度も

見たわ」

岩雄は洋杖を小脇に、腕を拱いて默つて頭垂れて居た。何物かゝ絶ゑず耳許で呟いた、「フォーゲット、ミーナット、何時までも僕を忘るな、何時までも妾を忘る勿」

天流子は狎へるやうに取縋つて、

「阿兄さん、私、お姉さまには隨分お世話になつてますの、私を可哀さうと思つてお姉さまに逢つて上げて下さい、そしてお姉さまが阿兄さんのことを思つて被居るやうに、阿兄さんもお姉さまを愛して上げて下さいまし、お願ひですわ」

「笹木さん」

實も哀訴するやうに、

姉は、勿忘草を思ひ出の種として、今も大事に書物の間へ秘藏て居ます、

一度見てやつて下さい、僕、両手を下げてお願ひします……」

手の甲でまた眼を拭いた。それを見ると天流子は睫毛を滲ませた。

岩雄は決然として云つた。

「諾、絹江さんに逢はう」

五十

「だけど今は可けない」

岩雄は洋杖を持ち直して「今妹の子が何者かに浚はれて行つたのだ、僕はそれを捜さなけやならない」

「妹の子つて誰ですの？」

天流子が不審さうに訊いた。

「妹の子とは和歌子の子だ」

「和歌子姉さん？」

天流子は驚異の眼を睜つて、

「そして阿兄さんは和歌子姉さんにお逢ひなすつて？」

「逢つたよ、お前は大阪に居て姉さんに逢つたことはないのか」

「まだ一度も」

天流子は哀しさうに俛いた。

「ぢや、無論母にも逢つたことはないんだね？」

「阿母さんに？」

天流子は思はず面を擡げた。急き込んで、

阿兄さんは阿母さんにもお逢ひなすつて？」

「逢つたよ」

大病で被居るんですつてね」

「誰が？」

笹木の阿母さんですわ」

天流子は半帕を眼に當た。

「笹木の母が大病だつて？」

岩雄は懐疑の眉を寄せた。天流子も訝かしさうに、

「阿兄さんは何處の病院で御面會なすつて？」

「何處の病院で逢つたかつて？」

「ね」

「それは何かの聞き間違ひだ、阿母さんに病氣らしい樣子は微塵もなかつたし、假し病氣であつたにしろ、入院なぞ出來るやうな境遇ぢやないのだ、お前が逢つたら吃驚するだらう」

「だつて、今日明日の日が知れないつて、秋山から聞きましたわ」

實が喙を容れて、

「仍且天流子さんが欺かれて居たのだ秋山は最初から三百圓詐取する目的でやつた仕事なのだ」

「秋山に三百圓詐取されたの？」

岩雄が實に訊いた。

「さうです、阿母さんが大病で入院してゐるから、實母を思ふ心があるなら金を出せと云つて、秋山は天流さんから三百圓の金を脅喝したのです」

「彼奴詮方のない畜生だ」

公園の一方を見詰めて、

「先刻見失はなかつたら、呑と懲しめてやるところだつたのだ、惜いことした」

「そして阿兄さん」

天流子が待ち兼ねて、

阿母さんや姉さんは何處に被居るんですの？」

「阿母さんも和歌子も此公園に居るのだ」

「此公園に？」

天流子は意外の面持で「何處に？、何處に阿兄さん」

「そら、彼處に居る」

岩雄が後方を指さして見せた、天流子も實も其方を見向いた。と、四五間隔てた松の木に力なく取縋つて、聲も枯々に京子の名を呼ぶ二十七八の見すぼらしい女が居た。

「彼女が和歌子だ」

岩雄が云つた。

「彼女が姉さん？」

天流子は彈かれたやうに訊き返した曾て學校の歸途を秋山へ道寄して、其歸るさに生玉寺町で見た母子の一人が現在血を分けた姉の和歌子であらうとは、天流子は夢にも想像せぬにことであつた。

「彼の方が和歌子姉さん……？」

それと同時に天流子は子供のことを聯想した。寺町で見た女の子、盲目乞食と一緒に居た女の子、安居天神前で俥に乘せられた女の子、而も姉の子は何者かに浚はわたといふ。

「ぢや先刻の子が姉さんの子よ」

天流子は思はず叫んだ、實も曾て和歌子母子に見覺えがあつた、鹿造を洋書の包で毆り付けた時、瞥と見た母子が婚約ある女の姉と姪であつたのだ。

彼子だ彼子だ！

實は躍り上るやにうして叫んだ。

「天流さん、彼の子だ」

「もう駄目だわね小兄さん」

「駄目なもんか、僕が取戻して來る」

實は裾を褰げて、疾風の如く駛り出した。

五十一

實は公園を北へ抜けて電車道へ駈出して見た、けれど其處らに京子を載せた俥の居やう筈もなかつた。

「俥は慥か坂を昇つたのだ」

實は逢坂町を東へ走つた、さて坂を昇り詰めて何方へ駛つたかゝ疑問であつた。

「おい、車夫」

實は安居天神前まだ引ッ返して、其處に居合す車夫に京子の行方を訊いた

「職人體の男が五つぐらゐの子を連れて俥に乘つたらう、僕は向ひ側から見て居たのだ、何處まで行つたか敎へて呉れ給へ」

息せき切つて訊いた。車夫はけろりとして

「何時頃のこつたす？」

「今だ、先刻だ」

仲間を見回つて

「おい、お前知つとるか、職人が女の子を連れて俥へ乘つたのやさうな、誰の俥やろな」

悠々と莨を吹かしてゐる、一人が

「あア、そんなら留公や」實を見て頷きながら「乘りました、乘りました、子供は慥か女の子だしたな」

「さうです、何處まで行つたらう？」
「知りまへんな、私が行かんもんやでな」
「何處までの約束とも聞かなかつたかね」
「一向聞きまへん、もう大分以前のことたすせ」
實は落膽して立つてゐた、其處へ上手から空俥が戻つたものがあつた。
「君、君」
「實は走り寄つて「君ぢやなかつたかね」
「俺が何うしたつてんで？」
車夫は喧嘩越であつた、蹴込に腰を据ゑた以前の車夫が、莨の吸殼を轅棒で羽叩きながら笑つた。
「はゝゝ、源兼氣が早いでな」
立ち上つて、

「源さん、其お方はな、人を捜してなはるんや、お前やなかつたらう？職人と女の子を乗せて行つたのは」
「違ふ〳〵」
一人が打消すやうに云つて
「源兼、お前何方から來たんだ？」
源兼は漸と得心して、
「うむ、さうか、俺また喧嘩を買はれたのかと思つてな、俺天滿から眞法院町まで送つて來たんだ」
「留公に逢はなんだか」
逢つた、逢つた、職人と子供を送つてやがつたせ」
「何處で逢つたかね？」
實が急き込んで訊いた。

「上本町五丁目で逢ひやした」

「これから直ぐに追跡て呉れないか」

實は俥へ乘らうとした、源衆は支ゐるやうに制めて

「お止しなせゐ、迚も駄目だ、せめて椎寺町邊だと追ひ付けねゐこともねゐが、五丁目と來た日にや迚も〳〵」

「僕一人で走つても駄目だらうか」

「先方だつて駛つてますからな、お前さんが五丁目まで被居る間には留公は何方向けて俥を飛ばせてるか知れたもんぢやねゐ」

「眞實や」

傍の車夫が合槌を打つた。實ぱ氣が氣でなかつた。

「電車でも駄目だらうね」

「電車だつてお前さん、動きまりす、ちん〳〵が容易なこつちやねゐかちな

三人の車夫が同時に笑つた。

恰ど此時、恵比須町の方から一臺の自働車が走つて來た。

「さうだ、自働車で追駈たら譯はねゐや」

源衆が揶揄ふやうに云つた、實は佶と睨め付けたが、直ぐに自働車の方へ羨望の眼を向けた。

「彼車にさへ載せて呉れたら」思ひつゝ見迎ゐて居ると、自働車の速力が俄に鈍つて、車上から、

「美山君」

と呼んだのは忘勿草を分けて貰つた親友の松山君であつた。

おう松山君

實は思はず勇躍して、

君、僕を乘せて呉れ」

「おう、乗って呉れ給へ」

松山は自働車を停めて實を扶け乘せた。實は口早に事情を語つた。

さういふ理由だから急いで走つて呉れないか」

「諾來た、おい運轉手、全速力」

命令一下、自働車は爆音勇ましく走り出した。

五十二

自働車は矢の如く飛んだ、怪物の唸るやうな喇叭の音が、天王寺西門前を左手へ曲ると、椎寺町を東へ上本町九丁目かゝ一直線八七、六五丁目と驀地に走つて四丁目の空堀筋にかゝつた頃、遙の行く手に一輛の俥を認めた。

「松山君、彼俥だらう」

實は車上から乘り出すやうにして云つた、

「待ち給ゑよ」

松山は合財袋から双眼鏡を取り出して、敏捷く行く手を覗きながら

「君の戀人の姉の子だと云つたね幾才位の子だ？」

「五つぐらゐだ」

「女の子だらう？」

「さうだ」

「ちや彼の車だ、頭を角刈にした男が懸命に抱き締めてる」

「それだ、それだ

實は雀躍して悅んだ、自働車は一氣に驀進した。

やがて車が内久寶寺町を右手へ曲らうとした時、實が自働車から飛び下りて、

「待てッ、待てッ」

一二間追ひ駈て突如車の轅棒を押へた。車上の角刈は意外の眼を睜つたが早くも其れと見て蹴込を踏み鳴らしつゝ怒鳴つた。

「車夫、搆はねゝで走つて呉んな」

車夫は走らうにも實に支へられて一歩も踏み出せなかつた。

「走れと云ふたかて走られやしまへんがな」

悠長な大阪辯でお客を見回りながら云つた、其間に實は職人の袂を掴んだ

「おい、君降ろ」

「何が、何でい」

角刈は振り放して、

「青二才の癖に生意氣なことさらしやがると承知しねゝぞ」

「何が生意氣だ

「何だつて」

「此子は誰の子だ？貴樣は親の目を偸んで浚つて行かうとして居るのぢやないか

實も腕を卷繰つて突ッかゝつた、恰ど日沒刻の退廳時だつたので眞鍮の記號を着けた工廠の職工、カーキ色の看護服を着た被服廠の女工が見る間に黒山の如く群つて、さしもの街路も通行止の狀であつた。

「書生さんの云ふ通り、角刈が惡い」

「子取やわ、ちよいと」

「警察へ突き出せ」

「引き摺り卸せ」

群集は口々に叫んだ、角刈は赫と逆上せて、突如實の横面を毆りかける間髪を容れず、

「何をするッ」

其手を逆に捻ぢ上げたのは思ひがけぬ一名の警官であつた。角刈は顔を顰めて　痛い、痛い」

降りろ、本署まで來い」

車から引摺り卸されて角刈が何か云ひかけると、警官はまた一喝した。

默れ、貴樣は天王寺公園から此子を浚つて來たらう、此方の訴へによつて何も彼も分つてゐる」

云つて後方を振回つた、後方には松山が突ッ立つて居た。進み出て、

「ぢや此子を連れて行つても可いですね」

「何うぞお連れなさい」

「有難う」

實に向いて、

「美山君、可いんだよ」

「さうか、有難」

實と松山は京子を自働車に扶け乘せて、揮發油の臭氣を首土產に、元來た道へさつた驀進……。

五十三

「和歌子。京子は居ましたかね？」

信子は和歌子に取縋つて訊いた和歌子は泣かじと唇を噛んで、

「何時か戻るでせう、暗くならない間に歸りませう」

信子の手を曳いて藤棚の下を出ながら、和歌子は袖口で涙を押へた。

「それでは私が、私が濟まない」

見ぬ眼を睜つて四邊を見廻し、

「京子、京子や……」

「もう阿母さん」
和歌子は泣いて、
「心配なさらなくても、縁さへあれば何時かまた逢ひますわ」
「情ないこと云つてお呉れでないよ」
信子も泣いて、
「岩雄は何處へ行つたのだらう、捜して呉れては居るのだらうか、若し萬が一京子が知れなかつたら私は、私は生きては居れない……」
「何といふことを仰有るの阿母さん、京子が見付からないからと云つて阿母さんまで……」
「いゑ〳〵、私は生きては居れない、お前の云ふことに逆らつて、私が此處まで連出したのだもの」
「それも皆阿母さんが、私や京子のことを思つて下さればこそぢやありませんか、何も彼も約束事ですわ、阿母さん、私もう何ともありません、京子が居やうと居まいと私もう、何とも、何とも、思つちや居ません……」
云つて、泣かじと唇を噛み締めたが、涙は止め度なく頰を流れた。
「京子――、京ちやんや……」
信子は和歌子の側を放れて、的もなく其處らを呼び歩いた。
時しも、一臺の自働車が喇叭の音も勇ましく、懸鈴樹並木の間を南へ抜けて、信子の方へ、信子の方へと進んで來た。
「あれ、危險い」
和歌子が駈寄つて信子を抱ゑ寄せてた時、思ひも染めぬ京子の聲で、
「阿母ちやーん！」
はッと思つて見上げる隈に、京子や、岩雄や、若い女や、男の顏が映つたそれらが皆自働車に乘つてゐた。

「和歌子、今の聲は京子ぢやありませんか」
信子は刺耳立てゝ訊いた。和歌子は信子の手を吾胸に當てゝ
「阿母さん、私生きてませうね」
「生きてゐるかとは？」
「私、頭が呆乎として、平日の私ぢやないやうに思ふんですもの」
「無理もありません」
袖口を引き出す手へ京子が獅噛み付いて、
「祖母ちやん」
「あ、京子だ」
「阿母ちやん」
「京子……」
和歌子は犇と抱き締て「仍且夢ぢやなかつたさうな」と泣く。

「阿母ちやん、あたし此の小父さんに連れて來て貰つたの」
前後して自働車を下りた三四人の中の實を指して云つた。岩雄が前み出て
「和歌子、阿母さん、悦んで下さい、京子を取戻した上に妹の天流子も連れて來ました」
「天流子ですつて？」
和歌子と信子が同時に叫んで。
天流子が走り寄つて、
「阿母さん、姉さん、私、天流でございますわ……」
嬉しさと哀しさで胸をわく〳〵させた。
祖母ちやん、先刻白いお銀貨下すつた綺麗な綺麗な小姉さんよ」
京子が横合から註を入れた。
「ぢや、あの嬢さまが天流子……」

和歌子は一二度見たことがあるので頻と小首を傾けて居たが、日外寺町で逢つたことを憶出して、

「ぢや仍且天流ちやんだつたのか」

岩雄が、

「天流は阿母さんや和歌子に逢ひたいために、三百圓といふ金を工面して秋山に渡したのだが、それは皆秋山に詐取されて了つた」

「ぢや、天流ちやんも私たちに逢いたいと思つて呉れて？」

「逢ひたうございましたわ……」

天流子が泣けば信子も和歌子も一齊に嬉し泣きに泣いた、

「天流ちやん……」

「姉さん……」

「天流子……」

「阿母さん……」

手を取り合ふ親子を見るに見兼ねて、岩雄も、實も、松山まで顔を背向けた。

四邊は次第に暮れた。

五十四

巽家の客間で鹿造は茂子と對座して居た。

「そ、爾いふ理由ですから、何うぞ、御、御安心なすつて」

鹿造は、沈着のない眼をきよと〳〵させて、絶ねず四邊に注意を配つて居た。

「まあ爾ですか、それは大變お骨折でした、ぢや、情婦の方は兎に角片付いた譯ですね」

茂子は吻として云つた。

「さ、さやうでございます、今後情婦から何とか申して參りましたら、それこそ、法律問題でございます、すでに、手切金を受授いたしました以上、一語と雖も口は利かせません」

「私の方もね秋山さん、大層都合よく運んで絹江が承諾して呉れました、今も念を押して來たところですが、彼女も義理に詰まつて觀念して居るらしい樣子なのです」

「さ、さやうで」

「ですから、此上は種さんさへね」

「そ、その方も大丈夫でございます、私から懇々説き勸めましたので、先生も二つ返事で納得して呉れました」

「二つ返事で納得した？」

「さやうでございます」

茂子は考へて、

「爾那ことはないでせう、私は種さんを納得させるのが一等骨折だと思つて居ます」

「そ、それを承諾させましたのでございますから、其邊をお認めが願ひたいので」

意味ありげな目許を向けて、

「奥さんの前で何でございますが北島さんを承諾させますまでの苦心と申しましたら、それは〳〵、形容のいたし方もない位で、實に早、臍の緒切つて以來の難事でございました」

「まあ爾でしたか」

茂子は半信半疑であつた。

「でございますから、萬事御安心なすつて、此上は御祝儀の運びさへつきましたら、それで何も彼も奥さまのお望み通りに相成りますやうな譯で」

茂子は默つて頷いてだけ見せた、鹿造は何やら傳へに來た女中の足音にまで悸としながら、

「ところで、その何でございます」

茂子の面色を偷み見て、

「それを口實になぞとお取り下さいますと、私、ほんとに心外でございます、その邊は前以て申上げて置きます、決して、それを恩に被て戴かうとは私、毛頭考へて居りませんので、はい」

茂子は怪訝さうに眉根まで寄せて、

「秋山さん、貴方今日は餘ッ程何うかして居ますね、だつて何だか粗忽してばかり被居るぢやありませんか」

「實は、その、何でございます、突然、その、債權者の襲擊を喰らひまして誠に何うも早や」頭を掻いて、

「差押へでもされたと仰有るのですか」

「それが私の、一身上に大變動を及ぼさうといふ譯なので、決して多額の金高ではございません、眞の、眞の僅少なので」

「ぢや、お金でも用立てゝ欲しいと仰有るのですか」

「何うも早や、恐れ入ります」

「幾許ほど？」

「五百圓ばかりお願ひいたしたいと存じますのでございますが」

「五百圓？」

考へて、

「色々骨を折つて戴いたのですから、御用立しませう」

「御融通下さいます？」

今御入用なのですか」

「はい、實は、その」

半ば聞かず茂子は立ち上つた。

其處へお雪が出て來て、

「奥さま、北島の旦那様がお歸りになりましてございます」

「さう、恰ど可いところだ、鳥渡此處へ來て貰つてお呉れ」

鹿造は俄に膝を浮せた。

五十五

「あ、種さん、好い處へ」

茂子は席を設けて見遣ゐた、種吉が沈み込んだ顏で默つて席に着くと、鹿造も度胸を決めて堅てかけた膝を元へ直した。

「や、北島さんですか」

おど〳〵した擧動で鹿造も恁う云つた。種吉は誰にも口を利かなかつた。

腕を拱んで伏目勝に控ゐて居た。

「種さん、承諾して下すつたのですつてね、眞實に有難う」

茂子は嬉しさうに頭を下げた。

「何をですか伯母さん

種吉は不審さうに茂子を見た、眼鏡の當つた鼻の附根に小皺か幾筋も彫まれて居た。

「何がつて、絹江と結婚のことですよ」

絹江さんと結婚することを承諾したかと仰有るのですか」

承諾して下すつたのでせう、ねゐ秋山さん、爾那やうなお話でしたね」

鹿造は両手で膝頭を擦りながら

「全く、全く左様で」

憐憫でも乞ふやうな眼許を種吉に向けて、

「北島さん、唯今、その、奥様に申上げましたところでして」

「何をですか」

「その、それ、先日お約束申しました一件で」

「あなたと約束したことは何一つない筈です、貴方には和歌子のことで懲々してますからね」

「ば、場所柄、何うも、怖れ入りますな」

茂子が聞き咎めて、

「ぢや種さん、あなたは絹江と結婚することを秋山さんに承諾なすつたのではないのですか」

「以ての外です」

種吉は決然として云つた。向き直つて。

「伯母さん、私は貴女や伯父に懺悔をしなければなりません」

鹿造が指頭で疊をこつ〳〵云はせた、種吉は見向きもしなかつた。

「私は今日まで貴女や伯父を欺いて居ました、仇を以て恩に報ふて居たのです、良心の苛責に堪ねません、それよりも一層私は、天の審判の辛辣である ことに畏怖してゐるのです、今私の受けつゝある極度の悲哀は、あなた方を欺き、私自身を欺いた罪の報酬として、當然受くべき宣告であつたのかも知れませんが、あまりに迅速で、あまりに嚴格でした、目的の善惡は兎も角、手段の巧拙を問はなかつたといふことが、私に取つては非常な過失でした、伯母さん、私はあなた方を欺いた應報として、妻と子を同時に失ひました」

聲と共に涙が種吉の頬を流れ落ちた。

「それぢや種さんにはお嫁さんも子供もあつたのですか」

「十年近く連れ添つた家内と、今年五つになる女の子があつたのです」

「まあ」

茂子は呆れた眼を鹿造の方へ向けた。鹿造は座に堪ゑ兼ねて匆遽に立ち上り、

「私鳥渡その、急、急用がございますので」

周章と襖の外へ出かけて鹿造は悸として立ち止つた、其處には實と天流子と松山が立つてゐた。

「秋山」

實が一喝した。

「秋山さん、あなたは好くも私をお欺しなすつたわね」

天流子が怨めしさうな眼許で睨め付けた。秋山は慌てゝ椽側へ出た、椽傳

ひに逃げ出さうとしたのであつた。

と、椽臺には岩雄が和歌子と京子を背後に庇ふて立つて居た。

「秋山ッ

一喝を喰はせると同時に、岩雄は秋山の胸倉を掴んだ。

秋山は顔ゐ上つた。

五十六

岩雄が秋山を捉へて居る間に、

京子は袖の下を潜つて客間の内を覗いた、種吉を見ると走り寄つて、

「阿父ちやん」

「あッ、京子だ」

種吉は狂喜して叫んだ。父子は犇と抱き合ひながら、

「お前一人か」

「阿母ちやんも居るの」

京子は種吉の手を捉つて椽臺まで曳いて出た。

「阿母ちやん、阿父ちやんよ」

京子は和歌子の手に取附いたかと思ふと、其手を種吉の手に組み合はせて

「阿母ちやんと阿父ちやんと二人になつた、嬉しいな」

椽臺を謳ひつゝ躍り歩いた。

「和歌子、濟まなかつた、許して呉れ……」

種吉は和歌子の手を握りつゝ云つた。和歌子は嬉し悲しで泣いてゐた、天流子も泣いた。

「伯母さん」

實が茂子の傍に前へ出て、

「あなたは北島さんの細君を知つて被居るでせう、天流さんの實の姉です」

「ぢや和歌子さんかい」

「さうです、そして此方は岩雄を指て、「天流さんや和歌子さんの實兄で笹木岩雄さんです」

「天流子の阿兄さん？」

「それよりまだ伯母さんを驚かせることがありますよ、僕の姉の意中の人といふのは此笹木さんのことです」

「絹江の意中の人？」

實は俄に、

「さうだ、笹木さん、姉に逢つてやつて下さい、松山君、此詐欺漢を頼む」

「諾、引き受けた」

松山は岩雄の手から秋山を預つて、逃げ出さうと狂ふ秋山を思ひ切殴り据

ゐた。逃がすか畜生、貴様は警察の手へ渡すのだ」

其間に岩雄を離室へ連れて行つた、茂子も立ち上つて、

「私も絹江に詫言しなけやならない」

二人の後を追ふて行つた。

「姉さん、笹木さんが來ました」

實は椽臺へ駈上つて云つた、締め込んだ障子を開いて、病床に臥つてゐる絹江の顔を覗くと、思はず仰け反つた。

「何うした實君」

岩雄が走り寄つて抱き止めた。

「姉は、姉は……」

實は聲を揚げて泣いた、岩雄も驚いて絹江を抱き起した、唯さへ透明るやうな絹江の膚は、水晶のやうに白く冷たく絶命てゐた。而も、両の袂で確と

押へた乳房の下は、牡丹花のやうな唐紅の鮮血に染つて……。

「絹江さん、僕です、笹木岩雄です

岩雄は耳に口を寄せて叫んだ、けれどもら絹江の耳へは聞ゐなかつた。

實が氣を取直して枕の下を探すと、美事な筆蹟で三通書き遺してあつた。

一通は伯母の茂子へ、一通は實へ、殘りの一通には唯「絹より」としてあるだけで宛名はなかつた。

「伯母さん、姉の遺書です」

後れて駈付けた茂子に、實は其一通を渡した、中にはこれだけ書いてあつた。

恩知らずとお叱り下さいますな、何うせ永くは生きられぬ私です、せめて清い一生を了らせて下さい。

絹江

伯母上

「絹さん、何といふ早まつたことして呉れだのた」
茂子は死骸に取縋つて泣いた。
實にも簡單な文句であつた。
實さん、天流さんと仲よくしてね、二人の幸福を冥土から祈つて居ます
よ。
殘りの一通を實が開封した、中には文字は一字も書いてなかつたが、勿忘
草の栞が入つて居た。
「これは笹木さんだ」
實は涙を拭き〳〵岩雄に渡した、岩雄は思はず涙を呑んで、
「絹江さん、忘れちや居ません、今後も忘れません、肉を放れて靈的に貴女
と僕とは永久の夫婦だ」

「兄さん」
實は岩雄の手を痺れよと握つて、
「姉に代つて僕が感謝します……」
天流子も和歌子も、皆絹江の遺骸を圍んで泣いた。

からみ藤　後編　終

大正六年拾貳月廿五日印刷
大正七年一月一日發行

小説
〔からみ藤〕
後編

定價金五拾錢
郵税金六錢

著者　小川霞堤

禁無斷興行
著作權所有

發行者　大阪市北區曾根崎中二丁目百九十六番地　丸山他三郎
印刷者　大阪市南區櫻町四丁目十二番地　紅野次郎
印刷所　大阪市南區櫻町四丁目十二番地　紅野印刷所
發行所　大阪市北區梅田冀面電車前南入　贅六堂出版部
振替大阪二七七五二番

贅六堂出版部發行

島川七石氏著

松浦舞雪畫伯口繪

新開小説家として聲名隆々たる島川七石氏の技倆は既に社會一般の識る所なり中にもわけて本編は著者獨特の味あふ一種妙の大活劇的悲劇小説たり乞ふ一讀あらん事を

現はれたり、戰慄すべき大の毒婦花も恥ぢふ十七才の身で世にも恐しき深刻惡辣なる大兇賊猿猴健次を治め子爵の若殿にて不良青年の團長をば三寸の舌頭にて醜弄し尚飽足らず其他社會階級の鼻下長連を散々手玉に取り所有る罪惡を犯すには悲劇あり活劇ある眞に底の知れぬ莫連女なり天の制裁は何んぞ此毒婦を誅せざる可きや終に兇漢にして元の戀人たる高田爲吉の爲め身を亡すに到ると云ふ、

あゝ恐しきは虚榮の罪、

全二冊
四六版頗美本
口繪コロタイプ
定價各金六拾錢
送料各金六錢

■贅六堂出版部發行■

■小川霞堤氏著■

■廣瀬楓齋畫伯裝幀■
■松浦舞雪畫伯口繪■

全六四版頗美本
二口繪三色版
定價各金六拾錢
冊郵税各金八錢

本編を讀んで
悲劇小說中の
悲劇小說の傑
作を知られよ

良人を助けて百万の財を積み、小間使の孕んだ良人の子を明石家の相續人とした夫人靈子に故あつて內緣である、戸籍面にはまだ先妻の名が消えずに殘つて居た、一朝良人の不慮の死が傳へらるゝや得たりと附け入る先妻黨、腹黑い姑を一味に抱き込んで大手搦手から明石家へ押し寄せる、夫人靈子の運命や如何に、お馴染の霞堤氏、火の如き同情と、花の如き才筆とを揮つて夫人靈子の運命を描く、涙と血と紙上に漓淋たらしむるものがある近來の傑作小說、弊堂の自慢の出版物、敢て江湖に推奬する所以である。

■贅六堂出版部發行■

■事實告白■

□女子教育家たらんとして……
□生活難ゆゑに……
□立身早道看護婦となつて……
□悲道の兄嫁の爲に……
□誘拐されて……
□虛榮に憧れ……
□初戀に失戀の結果……
□圖錄 夜の南地艶話……

松崎天民先生序
宮崎參昧先生著
四六版頗美本
定價金三十五錢
送料金四錢

俗謠子謠つて曰く
『戀といふ字を分折すれば糸し糸しと言ふ心』
とさう言つて了へばそれまでの話しであるが現代の結果如何なる禍を起したか各自胸中に情懷を秘め淪落の末路を僞わいず茲に告白す讀め若き男も女も

■贅六堂出版部發行■

■小島孤舟氏著■

■廣瀬楓齋畫伯裝幀■
■松浦舞雪畫伯口繪■

小説 春の憐れ

本編は新聞紙上に連載中は數十萬の讀者を熱狂せしめ續ひて大阪道頓堀角座にて成美團小織一行が上演するや數日大入の大好評判を博したる一大家庭悲劇小説

可憐なる令孃を渦中に投じて之に無頓着なる父陸軍中將、孝悌至情の妾戰死者の遺子御用商人の惡漢、忠實なる從卒等を配し義理人情、波瀾悲愁の運命に飜弄せらるゝ可憐なる令孃の苦心慘憺たる心理を描出したる一大傑作

四六版頗美本
口繪コロタイプ版
全一
紙數四百五十頁
冊定價金六拾錢
料送金八錢

■贅六堂出版部發行■

■小川霞堤氏著■

■廣瀬楓齋畫伯裝幀■
■松浦舞雪畫伯口繪■

悲劇小説 戀の潮

本編は著者作物の悲劇小説中の一大悲劇小説

女主人公『柚子』は相愛の青年士官と結婚間際に母の秘密に依つて添はれぬ仲となり、燃ゆる思ひを抱いて空しく血に泣く、抑も誰の罪か、父に戀物語あり、母にまた戀の哀話あり、海軍大佐の戀と低能下婢の戀、それらが錯綜して春風駘蕩裡に一幅の活畫圖を描き出す、戀の滿干は涙となり、詩となり、悲劇となり、活劇となる悲喜交も到つて殆んど應接に遑なからしむ、蓋し霞堤氏近來の名著、敢て江湖に推奬す

四六版頗美本
口繪三色版艶麗
全
定價金五拾錢
送料金六錢

■贅六堂出版部發行■

小島孤舟氏著

小説 楊柳行路

廣瀬楓齋書伯裝幀

本編は東京新富座大阪道頓堀角座に於て山長及静間一座にて開演し大好評を博したる悲劇中の悲劇小説です

編中に活現する主人公、弟は苦學生、姉は俠妓、妹は寒風吹き荒める淋しき滿洲の野原に、餅賣をなし實母を養ふ孝女にて、末の弟は不良少年となり養父は惡辣を極め、妻子には何如に冷酷無情なるか、何如に妻子を煩悶苦惱させるか、讀者をして嗚咽涕泣せしめる內に豆糟成金兄妹の同情者現はれ救わんとする折柄元苦學生の戀人カフエーのウエーターが墮落して滿洲に活動する馬賊首領の妾となり配下に戀の意趣返と豆糟成金家へ馬賊をして恐迫せしめ終に令妹を誘拐し配下に弄はれるを餅賣孝女と弟の苦學生が苦心慘憺して令孃を救い出すに何如なる大活躍せしか何如なる悲劇を演せしか著者得意の筆によつて眼前に展開せらる

四六版頗美本
口繪コロタイプ版
全
定價金五拾錢
送料 金六錢

■贅六堂出版部發行■

小説 夫人と運轉手

父を求める迄

■徳田春風 著■

■廣瀬楓齋書伯裝幀■
■松浦舞雪書伯口繪■

四六版極美
口繪コロタイプ版
全一冊
定價金三十八錢
送料金四錢

各地新聞紙上にて萬都の士女を驚かしたる新事實の悲劇小説

某伯爵夫人と自働車運轉手と情死せし悲慘、愛情、豊艶なる新事實物語は如何なる浮世の義理に心中せしぞ一讀して新聞以上の眞想を知られよ

■贅六堂出版部發行■

■島川七石先生著■

■廣瀬楓齋畫伯裝幀■
■松浦舞雪畫伯口繪■

悲劇小說

つゝぬ怨

本篇は新聞紙上に連載し續いて劇に演じ滿都の喝采を博したる七石先生最近の一大傑作なり

赤阪の俠妓姫松を渦中に投じて之に寡慾恬淡の叔父、腹に一物ある惡漢等を配し、家庭の裏面周圍出來事、義理人情の波瀾、數奇なる運命に醜弄せらるゝ可憐なる令孃の苦心、慘憺たる心理を描出して曲折變化を極め飽くまで讀者を魅し走らずんば止まぬ良悲劇小說なり

四六版頗美本
口繪三色版艶麗
定價各金六十錢
送料各金六錢

全三冊

■贅六堂出版部發行■

■新田霞畝氏著■

■廣瀬楓齋畫伯裝幀■

家庭小說

心の極窓

本編は著者獨特の傑作にして先に京都日の出新聞に掲載さるや多大なる好評を以て迎へられたる大悲劇小說

浮世の義理か、惡緣か、一女、一男をもふけし、圓滿なる家庭は、惡魔の爲にさかれ、夫は娘をつれて彷徨内後妻を迎い、妻は一子を連れ、涙を呑んで他家へ再緣なし、惡魔は尙も去らず、壁一重隣りに我子の悲命聞こゆる度に、血涙を絞る親の身は、あゝ親の因果か、子の不幸か、

四六版極美
口繪三色版
定價金五拾錢
送料金六錢

全

■贅六堂出版部發行■

■小川霞堤氏著■

■廣瀬楓齋畫伯裝幀■
■野津春葉畫伯口繪■

悲劇小說 さかるゝ仲は

關西文壇に於て悲劇作者の聲名隆々たる小川霞堤氏が巧なる筆先に生み出したる悲慘千態萬狀の大傑作

■家庭悲劇小說■

■さかるゝ仲は■

……親の讀むべき……
……子の讀むべき……
……心の底から血涙を絞る……
……人生の眞理に到達する……
……我國純然たる……

悲劇小說

全二冊　四六版極美口繪三色版　定價各金五拾錢　送料各金六錢

■贅六堂出版部發行■

■島川七石氏著■

■廣瀬楓齋畫伯裝幀■
■松浦舞雪畫伯口繪■

悲劇小說 隅田川百合子

著者一大傑作にして數十萬の讀者を熱狂せしめたる悲劇小說

本編の主人公たる『百合子』は圓滿なる某華族の令孃に生れ。温順にして孝なる彼女は終生共にすべき相愛なる良人清をして失戀に泣かしめ且つ悲慘なる境遇に逢着するも好く婦女の守るべき道を終始操守して覆水再び盆に歸るの喜びを見るに藝妓『若子』は戀に憧れし『清』を捨て終に隅田の藻屑と消ゆ行く身は如何なる心中ぞや天の非情？人の無情？

全二冊　四六版頗美事口繪三色版極美　定價各金五十錢　送料各金六錢

■贅六堂出版部發行■

■霞堤道人作□■廣瀬楓齋畫伯裝幀□

御道小說 甘露臺

宗教の自由を許されて居る以上、何宗を信じても差閊ひない譯であるが其れが爲めに思はぬ悲劇の演ずることが數限りもないほどある、姑が佛教信者で嫁が耶蘇教徒であつた爲めに不緣になつた例もあれば、折角の養子が金光信者であつた爲め家風に合はぬとあつて離緣になつた例もある、これも其一例に洩れぬ天理教信者の花嫁御が佛教信徒の家に嫁して爲有虐待を受けるといふ家庭的悲劇で、天理教の柱石△△權大教正の裁判事件を經とし、船場の富豪某家の家庭を緯として描いた事實小說、文章は至極平易で言々句々に血と涙が宿つて居る、百萬の天理教徒は勿論、一般家庭の好讀物として敢て江湖に推奬する所以である

全一冊　四六判頗美本　口繪三色版極美　定價金五拾錢　郵稅金六錢

■贅六堂出版部發行■

■小川霞堤君作□■廣瀬楓齋畫伯裝幀□

悲劇小說 露のちぎり

本書は著者が心血を傾注して創作せられし一大雄篇にして多大なる好評を博し眞に近來稀に見る良家庭小說なり

密秘の戀は恐る可べし、憐れ惡魔の呪ひにて、平和の家庭は忽破れ、浮世の底まで突落されし、可憐なる女主人公は、親を失ひ子に生別れ、一生涙の海に辿はせ、終生浮ぶ由も無く、ついに血涙を絞りつゝ、一曲を奏し、消ゆく彼女に、深甚なる同情の涙を注げ

全二冊　四六判頗美本　口繪三色版極美　定價各金五拾錢　送料各金六錢

■贅六堂出版部發行■

再版

小說 岩しみづ

□塘郎先生著□ 廣瀬楓齋畫伯裝幀

家庭小說の新世紀を作らん爲に「岩しみづ」の一編を著はす著者は一流の犀利なる識見と大膽なる筆端火を發して實業界にて有名なる岩上清澄の家庭に燃ゆる如き熱情と公爵勝浦家、銀行家大西仙藏、俠妓清香と淀濱銀行の關係にて血と汗と涙と滴り落ちる事實を遠慮なく素破拔いた本書は泣いて考へる小說なり

突版總クロース製
裝幀絶美
天金付函入
口繪三色版頗艶麗
コロイプ挿入
紙數三百二十五頁
定價金壹圓
送料金八錢

再版

悲劇小說 大正橋

春風郎著 廣瀬楓齋畫伯裝幀

四六版頗美本
口繪コロタイプ挿入
定價金五拾錢
送料金六錢

■滿都の土女を觀喜熱狂せしめたる新事實悲劇小說■

「此橋に刻んだ悲語一聲、一條の緋扱帶に想思の身を托してさんぶと許りに我が名は此橋月も氷る冱寒の水に投じてしまつた。男は花の浪華津を飾るのあらん限り八百八橋の中にもわけて壯麗眼を奪ふばかりの大正橋の設計永久に消ねない者松田工學士、女は紅南に咲いた久美の屋の勝江といふしほらしき名花一輪である、薄命か、惡緣か、そも又浮世の因果の此世に殘る私の俤だ」と言はふか、數奇な運命の糸、濃艶な紅情の夢、餘りに多情「どうせ望のたへた多恨の男女を泣かしめる其一齣の悲痛な事實なのである。あゝ戀の爲に身を屠むる紙屋死んでなつかしいお父さんの側へ參ります」治兵衛の狂熱は大正の御代にも變りはない、

■大阪道頓堀角座に於て山長一派を始めと して各地大劇場活動寫眞に大好評を博したる

■丸山贅六堂營業案内■

■貸本營業　者又は新期に營業遊ばすなら兎に角丸山贅六堂と御取引を開始下さるゝのが一番御便利です郵劵三錢御送り下されば早速に卸値目錄と取引案内を御送り申します

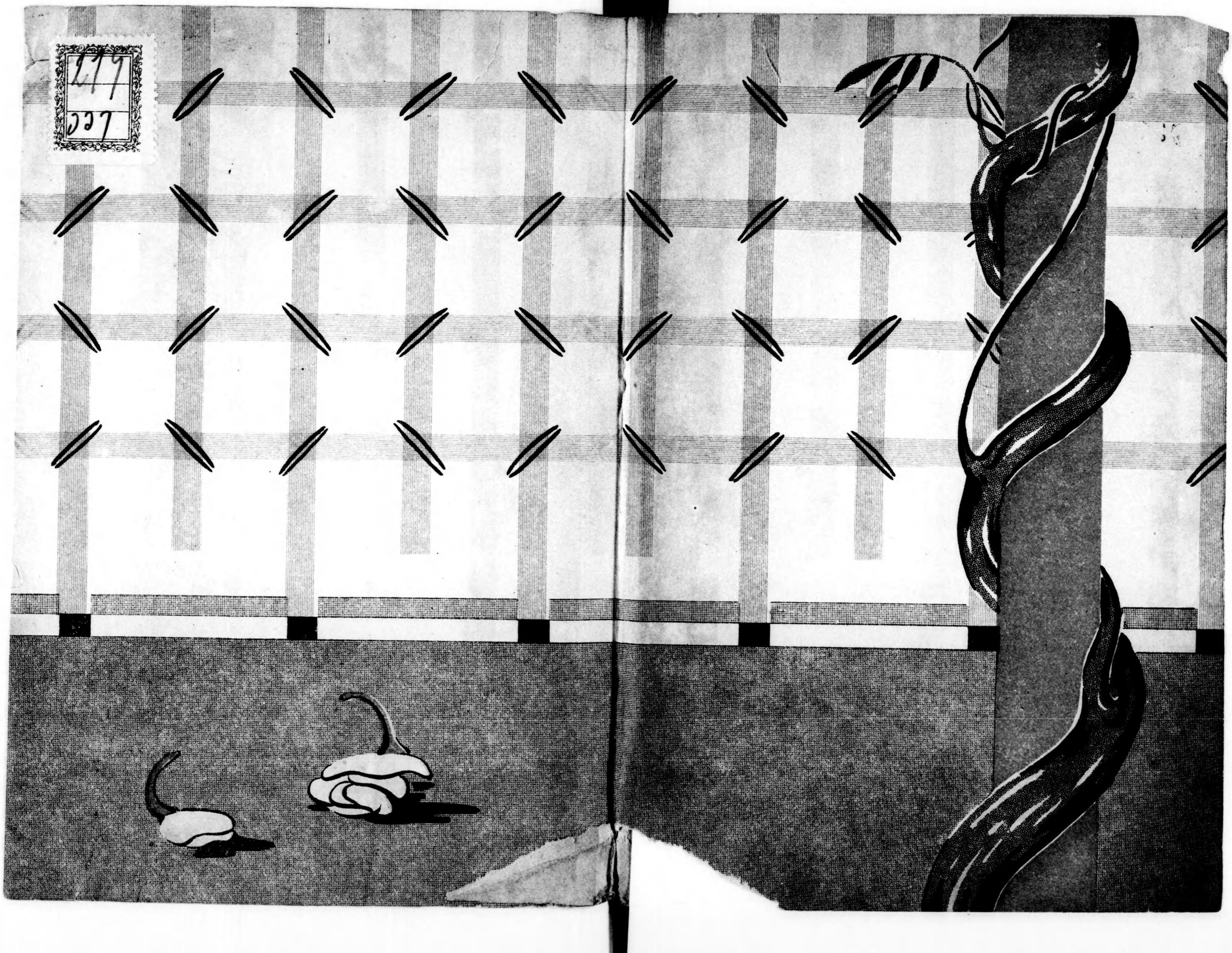
■丸山贅六堂は小説の出版及卸賣と貸本をも致して居りますから貸本營業者の相談役になり勉强するのが唯一の主義です

■丸山贅六堂は貸本向きの小説なれば東京版でも大阪版でも一切取り揃へて一番御安く致します

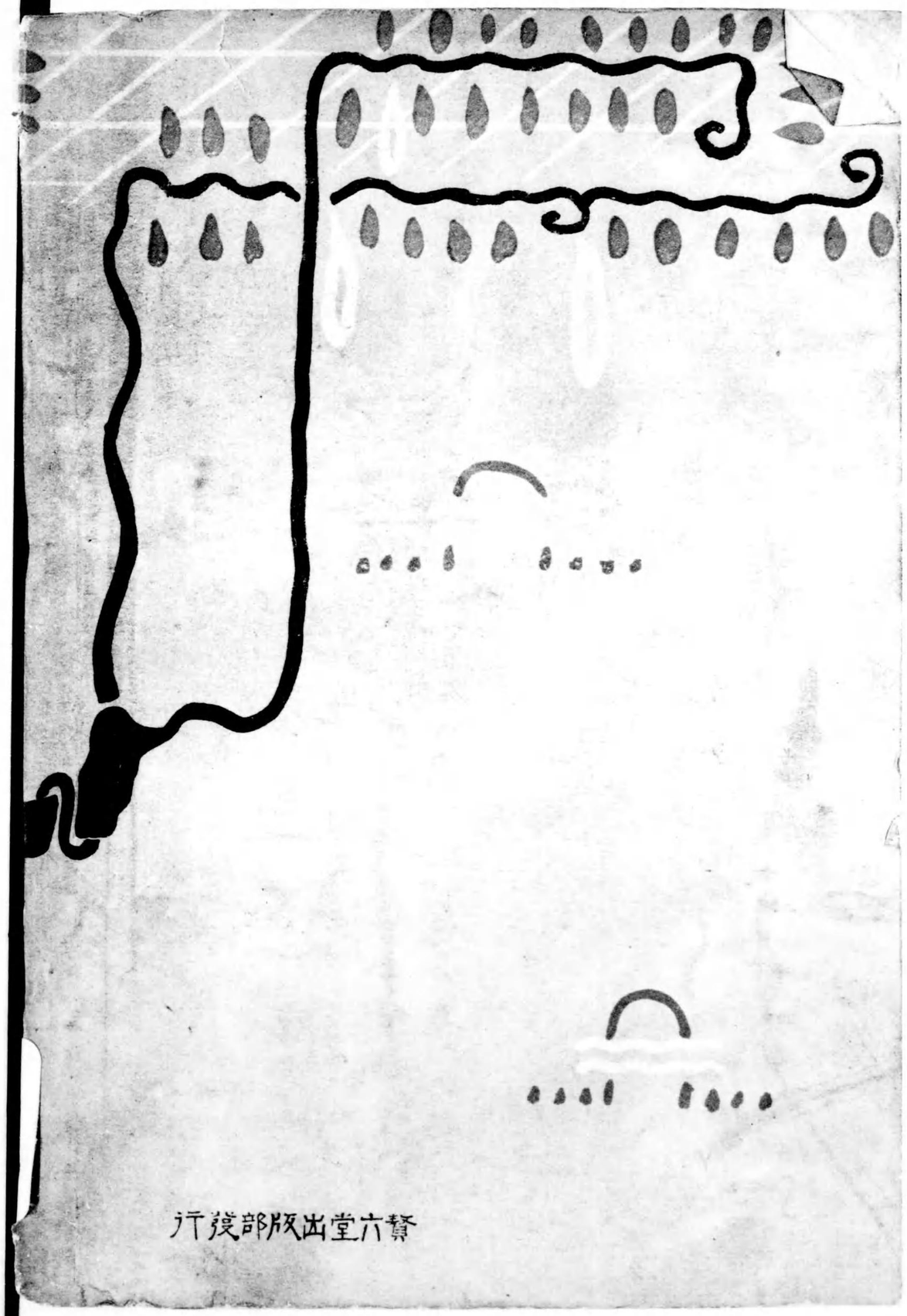
■丸山贅六堂は毎月新版月報を御得意へ送呈致し新版の御報告を致し升々と新版を發行致します

■丸山贅六堂は貸本向きに安價にて極面白い頗る美麗な新小説を毎月續本台帳、其の他貸本用の表紙附の方法や便利なる品が取揃へて有ます

■丸山贅六堂へ御越しになるには箕面電車梅田停留所前で（曾根崎警察東辻南入西側）御下車下さるのが一番御便利です



終



發行部版出堂六贊